

実習・研修報告

地域社会における伝統的祭礼の役割について

能登町鵜川地区の「にわか祭り」を事例として

服部 泰*

はじめに

本稿は2017年8月24日(木)から8月27日(日)まで、石川県鳳珠郡能登町および周辺地域において実施された「観光学実習」の報告を趣旨とする。また、実習の主たる学習材である能登町鵜川地区の「にわか祭り」について、伝統的祭礼が地域社会においてどのような役割を果たしているのかを学習の成果として論じる。

併せて、関連する資料や講話、観察をもとに祭りの概要を整理し記録すること、さらに祭りの現在の課題を整理することで、1つの事例として今後の祭礼研究に役立てることを目指す。

1. 石川県鳳珠郡能登町の概要と本実習の関わり

能登半島では、2009年に田の神を祀る祭礼「奥能登のあえのこと」が無形文化遺産に登録され、2011年に生物多様性や、景観と土地利用などが「能登の里海里山」として世界農業遺産に登録され、さらに2015年には切子燈籠を祀る祭礼「灯(あか)り舞う半島能登～熱狂のキリコ祭り～」が日本遺産に登録された。こうした資源が示すように、能登半島では半島に特有の気候が多様な自然資源を生み、その自然を利用して築かれた生活文化が多様な文化資源を生むことで、能登半島は魅力ある観光地として知られてきた。また、近年は東京から富士山を通過して京都や大阪に抜けるいわゆるゴールデンルートに続いて、新たな広域観光ルートとして提案されている「昇龍道」の一部としても注目されている。

一方で能登半島の先、奥能登に位置している能登町は、能登半島の中でも中心的観光地として知られる輪島市と珠洲市の間に位置することから、周辺の観光地として位置づけられ、二市と比較すると十分な観光振興が達成できていない。しかし、民間によって能登町地域活性化推進協議会が発足したことを契機に、2011年以降協議会と町との連携による積極的な地域活性化および観光振興が取り組まれてきた。本学部も、能登町と東海大学との間で結ばれた包括協定にもとづき2012年8月のゼミ合宿を皮切りに2017年まで毎年能登町を訪問している。2012年11月には「能登町魅力アップおよび若者の観光客誘致に関する提案」事業をゼミとして受託し、その報告書を

* 東海大学観光学部観光学科講師
投稿日2018年11月29日 受理日2018年12月4日

もとに能登町観光マップが製作された。2015年より授業科目として「観光学実習」に位置づけられている。

本実習は、①能登町の観光資源の活用と保全に関する学習、②能登町を含む観光の広域連携に関する学習、③能登町鶴川地区のキリコ祭りである「にわか祭り」を題材とした文化資源の保護、伝承、変容、ならびに観光振興に関わる学習、④無形の文化財と地域アイデンティティに関わる学習の4つを目的としている。

①能登町の観光資源の活用を保全については、能登杜氏の酒造、複雑に入り組んだ九十九湾、縄文時代の真脇遺跡の訪問ならびに伝統的漁法の「たこすかし漁」体験などを学習材としている。②広域連携については、輪島市の朝市、キリコ会館、総持寺ならびに白米千枚田の訪問、珠洲市の揚げ浜塩田の塩作り体験、穴水町の山葡萄による独創的なワイン造りに取り組むワイナリーなどを学習材としている。いずれも特徴的な地形や自然によって育まれた一連の豊かな地域文化であることを学びとともに、さらに「半島1つを隔てると異なる文化を形成している」といわれるように細部では個々に多様な文化を示すことを理解した。また、各訪問地において関係者の講話や聞き取りなどを通して、能登町における観光振興の課題や周辺地域との広域連携の課題について検討した。

2. 能登のキリコ祭り

本実習の主たる目的は、前述の文化資源の保護、伝承、変容、ならびに観光振興に関わる学習と、無形の文化財と地域アイデンティティ関わる学習とにある。そのため、2014年より8月の最終週末に実施される「にわか祭り」に参画し、キリコの組み立てからキリコの奉納行事まで地域住民と共に取り組んできた。

そもそもキリコとは神輿のような担ぎ棒のついた巨大な灯籠（御神灯）を指し、4人ほどで担ぐ2メートル程度のものから、100人以上で担ぐ重さ2トン、高さ15メートルを超えるものまである¹⁾。能登町柳田地区のキリコはこの最大級のものに属するが、担ぎ手不足から現在では地域イベント「ござれ祭り」など限られた場で披露されるにとどまる（図1）。最も多い形は一般的なキリコといわれる縦型長方形の燈籠であり、能登町をはじめ広く能登半島で担がれる。一方、丸みを帯びた独特の横型の灯籠で車輪をつけて山車のように押して動かすものは袖キリコと呼ばれる。いずれのキリコもかつては大きさを競うよう制作されたが、現在は張り巡らされた電線にかかることを防ぐため大半のキリコは5メートルほどに抑えられている。

能登半島には200程度のキリコ祭りがあるとされ、7月から10月にかけて大小合わせて900基以上のキリコが担がれ



図1 ござれ祭りのキリコ

る。とりわけ奥能登エリア（能登町、珠洲市、輪島市）はキリコ祭りが盛んで多様なキリコが祭りを彩る（図2）²⁾。例えば、珠洲市の「宝立七夕キリコ祭り」ではキリコを担いだまま海に入りキリコをぶつけ合う。輪島市の「輪島大祭」で披露されるキリコは総漆塗りのものがあり、同じく輪島市の「奥津比咩神社の神事」では担ぎ手が女装をするならわしがある。能登町の「宇出津あばれ祭り」は、神輿を川や火に投げ入れ破壊するなど荒々しく、火の粉が舞う中で担ぎ手の勇壮な姿がみられる³⁾。



図2 能登半島のキリコ祭りの分布（のとネット）

3. 能登町鵜川地区の「にわか祭り」

能登町の南端に位置し、富山湾に面する鵜川地区は世帯数 60 程度、約 130 人が居住する集落である。江戸時代からイカ漁で栄えた漁村としての歴史をもつ。そのため、この地区のキリコ祭りは豊漁と海上安全を祈願するために行われてきた。祭りではこの地域の海の女神である市杵島姫命（いちきしまひめのみこと）を祀る海瀬神社にキリコを奉納する⁴⁾。鵜川の地区のキリコは車輪のついた袖キリコであり、「にわか」と呼ばれている。9つある集落が各々最大で高さ7メートル程度、幅5メートル程度のにわかを奉納するため、最大で9基のにわかを作られるが、担ぎ手不足により近年は7基程度となっている。また、各集落がその年で最も優れたにわかのできを争うことから、女神の気を引くために専門の絵師が勇敢な武者絵を描く（図3）。貼り絵などを駆使する武者絵は立体感に富み、迫力がある。加賀藩 13 代藩主の前田斉泰が能登を訪れた時、本来ならば数週間かかる袖キリコ制作を、にわか作りで組み立てて披露したことが由来とされる

ことから⁵⁾、現在も、描画を除きにわか
の組み立ては前日（金曜日）あるいは前々日
（木曜日）に短時間で行われ、時に祭り当
日（土曜日）の朝に完成することもある。

2017 年の実習では 18 名の学生が海瀬、
桜木、魚町の 3 つの集落に分かれてそれぞ
れの集落のにわかを担当した。集落によっ
て組み立てのタイミングが異なるため、早
いグループは能登町に到着した木曜日の
19 時頃から組み立てをはじめ、遅いグル
ープは金曜日の 20 時頃から組み立てに加



図 3 武者絵が描かれたにわか

わった。参加学生は組み立てから、祭り当日の安全祈願の「お祓い」、日中の町内「練り歩き」、
夜に灯籠の灯りをつけてすべてのにわかを連なり勢いよく走らせまた回転させる「乱舞」から、
翌日午前中の「奉納」まで住民に様々な教えを請いながら祭りを体験した（表 1）⁶⁾。

表 1 にわか祭りの準備と祭礼の流れ

時間	内容	学生の参加
1 か月程度前	武者絵のデザインの完成。	
1 週間前	資材の準備。材料となる竹の適度な乾燥のため、1 週間程 度の時間が望ましい。この前後では竹の強度を確保できな い。 武者絵の制作開始。	
1～2 日前	武者絵の完成。 にわか骨組み、構造の安定および紙貼りのための全体の 糸かけ、糊貼りと紙貼りなどの組み立て。	○
当日早朝	クレーン等を使ったにわか山車への搭載。	○
当日朝	宮司による安全祈願のお祓い（各地区順次）。	○
13 時頃	町内練り歩き。途中、アイスクリームや飲料などの配布。	○
18 時頃	見卸しの浜にすべてのにわかが集結。	○
18 時以降	「ヨバレ」 ⁷⁾ の開始。	△
20 時頃	見卸しの浜にて花火。 花火の終了を合図ににわかを連なり乱舞などを繰り返し 披露。	○
24 時まで	狭い路地を走る。	○
24 時頃	すべてのにわか海瀬神社に入宮（図 4）。	○
27 時まで	海瀬神社で乱舞披露。	
翌午前中	海瀬神社へのにわか奉納の神事。	△



図4 海瀬神社への入宮

4. にわか祭りの課題と意義

長い歴史をもつ伝統的祭礼である「にわか祭り」は、前述のように最盛期に比べて参加基数が減少しているが、その原因は5つ挙げられる。1点目は絵師の担い手不足である。最盛期には各集落が複数の絵師を抱え、その伝統を代々受け継いできたが、少子高齢化にともない後継者の育成が十分でなくなり、また都市部への人口流出にともない絵師も鶴川地区から離れて生活をしている者が多い。したがって、現在では集落間で絵師を勧誘しあうような状況となっている。

2点目は、労働の多様化による準備時間の不足である。かつては漁師町として栄え、住民の大半が漁師であったために出港も帰港も同時期であり、祭りの準備もまた同時期に行うことができたが、漁師が減少し労働の多様化が進んだ結果、にわか祭りの組み立てが短時間であっても、その準備期間を同時に確保することが困難になってきた。

3点目は絵師の減少と同様に、にわか祭りの担い手不足である。人口の自然減に加えて、少子高齢化が進んだことにより、若いにわか祭りの担い手が不足している。もちろんこれはにわか祭りに限ったことではない。なお、本実習における大学生の参加がなければ、参加基数がさらに減少していた可能性も考えられた。

4点目は漁業の衰退による祭りの意味の希薄化である。そもそもにわか祭りは豊漁と海上の安全を祈念することを目的としていた。しかし、漁師町でなくなった現在では祭りの目的が明確でなくなっている。かつては、にわか絵や御幣を札として船に飾ることが慣習であったが、そうした必要性がなくなり、にわか絵の価値も変化している。

5点目は祭りの形式や規則の不徹底である。伝統的祭礼においては形式や規則の継承は大きな意義をもつが、例えばにわか絵の価値の変化は、描く対象の変化をも生んでいる。本来は市杵島姫命（いちきしまひめのみこと）の気を引くために勇壮な男性として武者絵が描かれてきたが、近年ではそうした形式よりも若者や子どもが親しみやすいものを描く例がみられる。2017年は女性のアニメキャラクターをモチーフにしたにわか祭りが登場し、賛否両論を生んだ。事前学習の中では、文化人類学的観点から儀礼（ritual）、祭り（festival）、伝統的祭礼の中の、形式性や反復性、

順序性や非日常性の重要性について学んできたが、ここに示された課題は、現代における伝統的祭礼の文化人類学的課題を検討する材料となった。

さて、こうした課題の1つの解決策に、本実習のようによそ者を活かすことが挙げられる。例えば、能登町の取り組みの1つに、「能登キャンパス構想」がある。能登キャンパス構想推進協議会のウェブサイトではこの構想を「高等教育機関が存在しない能登を一つのキャンパスとして見立て、能登を舞台とした学生の交流や教育研究活動、地域貢献活動などを通じて、高等教育機関と地域の連携を一層促進するとともに、能登の地域創生に寄与することを目指す⁸⁾」としている。この構想は奥能登地域に加え、県も参加していることから、今後さらに具体化していくものと期待される。本実習においても、にわか祭りの運営や盛り上げに、参加学生が果たした役割は決して小さくなく、学生たちも地域住民から多くの感謝の言葉を頂戴した。

ただし、よそ者を活かすことは重要であるが、よそ者に頼るようであればその資源の持続可能性は高くない。2015年のにわか祭り終了後には、翌年の東海大学観光学部単独によるにわかでの参加の話も出たが、地域での祭礼はあくまでも地域住民が主体とならなければならない⁹⁾。本実習のレポート課題においても、多くの学生が文化資源の保護、伝承ならびに変容は、地域住民の参加を前提としているという理解がみられた。よそ者として地域に貢献できることは、自らが活動の主体となるのではなく、主体（住民）が活動できるようにすることである。また、主体が活動できるように貢献していくためには、よそ者は継続性をもって関わるのが求められるが、本実習ならびに前身となる諸活動について、複数回参加する学生が2割近いことはまさにこうした理解の賜物であるといえよう。

また、本実習において、祭りと地域アイデンティティの関係性を検討する上で1つの成果が得られた。にわか祭りが集落同士の対抗心をもとに争う傾向をもつことは、時に暴力性や身体的危険性をともなう。にわか乱舞などはまさにこの暴力性や危険性を孕むものであるが、それゆえに地域アイデンティティが暴力性や危険性の緩衝材となる。自らの安全はすなわち集落の安全であり、その集落の安全が地区や地域の安全を作り出し、ここに地域アイデンティティが色濃く形成されるのである¹⁰⁾。レポート課題においても、地域住民との交流の中で聞かれた言葉として「誕生日よりも祭りが大事」ということや、都市部で生活する出身者も「正月よりも祭りが大事」といって夏に帰省することに多くの学生が言及し、少子高齢化や人口流出という問題の中でこそ、伝統的祭礼が地域アイデンティティの醸成に果たす役割が大きいことを、身をもって体験していることがみてとれる。その上で、学生たちがレポートの中で自らの居住地域の伝統的祭礼に思いを馳せて言及していることが、本実習の1つの成果なのではないだろうか。

おわりに

2012年から始まった能登町での実習は、2014年に「にわか祭り」へ参画したことによって、無形の文化資源とりわけ伝統的祭礼の文化人類学的な意味を検討した上で、その伝統的祭礼が地域社会の中でどのような役割を果たしているのかをテーマとしてきたが、参加学生の体験的学習の成果として地域アイデンティティの醸成という1つの解答例がみえてきた。また、それはよそ

者としての自分と地域住民との関係性の中で感じられるものであるからこそ、自らがよそ者としてその地域に貢献できることがあることを学ぶ機会となってきた。人口減少社会や少子高齢化が叫ばれて久しいが、観光学の中で地域のあり方や地域活性化を学ぶ上で、政治的、経済的視点のみならず、伝統的祭礼にもとづく地域アイデンティティという、地域住民の心のありようについて考えるという視点を提供することが本実習の意義であるといえよう。

註

- 1) 堂下恵、2009年、「外部者参加による伝統祭事の活性化」、『日本文化人類学会第43回研究大会発表要旨集』、p.23。
- 2) のとネット、「キリコの灯り」、https://www.notohantou.net/archive/noto_only/kiriko.html、2018年10月8日閲覧。
- 3) 北國総合研究所、2016年、『日本遺産 能登のキリコ祭り』、北國新聞社出版局。なお、本書の「にわか祭り」の項には、2014年8月に参加した本学部学生がキリコを担ぐ姿をみることができる。
- 4) 能登町ふるさと振興課作成資料（2017年）に基づく。
- 5) 能登町ふるさと振興課作成資料（2017年）に基づく。
- 6) 筆者の記録に基づく。なお、表中の学生の参加欄は「○」が過去の研修すべてにおいて学生が関わったことを示し、「△」は1度のみ関わっていることを示す。すなわち、本研修においては安全面等を考慮した上で、参加学生がにわか祭りに最大限関わっていることがみとれる。
- 7) ヨバレとは、各集落の各家庭がにわか祭りの開催を記念して、親戚や職場の同僚などを招待し食事を振る舞うことを指す。2016年の実習では学生はヨバレにも参加し、多くの関係者と交流を図った。
- 8) 能登キャンパス構想推進協議会、「能登キャンパス構想」、<http://noto-campus.jp/about/>、2018年10月15日閲覧。
- 9) 黄世輝、宮崎清、1996年、「台湾における地域文化再生としての「社区総体营造」の展開」、『デザイン学研究』、p.101。
- 10) 同書、p.100。